

小学校における子どもの学びへの参加を支える授業  
づくり：  
他者や環境との相互作用による子どもの表れに着目  
して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 速水, 二葉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00007281">https://doi.org/10.14945/00007281</a>

# 小学校における子どもの学びへの参加を支える授業づくり

—他者や環境との相互作用による子どもの表れに着目して—

速水 二葉

Development of Classroom Teaching that Supports Children's

Participation in Learning at Elementary School:

Children's Expressions during Interactions with Others and their Environment

Futaba HAYAMI

## 1 問題の所在

ベネッセ教育研究開発センターが2010年に発表した『学習指導基本調査報告書』によると、6割を超える教師が「児童・生徒の学力格差が大きくなった」と答えているにもかかわらず、2007年調査の「授業を進めるときの目安となる児童・生徒」についての問いでは、5割以上の教師が「理解度が中位以上」と答えている。2007年の同報告書による小学生への調査からは、学力階層の下位とされる子どもの方が授業に集中できていない様子がうかがえ、理解度が低いと言われる一部の子どもたちは、授業内容が理解できないもどかしさや自信のなさなどを抱え、授業へ参加しにくさを感じているのではないかと考えられる。

これまでの筆者の授業実践は、基本的に一斉授業が多く、積極的に挙手をする一部の子どもたちが中心となっており、傍らには参加しにくさを感じている子がいたはずである。このような傍観者になりがちな子を生んでしまうような「教師主導の知識伝達型授業」から、今後は「学習者中心の知識構築型授業」への転換が必要である。教師として「子どもたちにどう教えるか」という方向からの視点ではなく、「子どもがどう学んでいるか」という子どもの側に立った視点を持ち、子どもを中心に据えた授業づくりが必要であると考えた。

## 2 研究の目的と方法

本研究の目的は、どの子どもも学びへ参加することをめざし、そのためにはどのような授業づくりをする必要があるかを明らかにすることにある。また、参加を支える環境づくりの工夫についても探り、自分自身の実践と結び付けて整理することとした。

そこで、実習校でのアクションリサーチを中心に、小学校3年生を対象として研究を進める。大学院で学んだ知見を取り入れながら、3年の担当学級で授業実践を行い、子どもの発話記録、活動の観察、ワークシート、振り返りアンケート等から学びの様子を分析する。他教師による授業実践も働き掛けたり、大学院で得た考え方を紹介したりすることで、新たな見方を広める。また、参加しやすい授業を支える環境をつくるための教師の働き掛けについて観察したりアンケート調査を行ったりするとともに、自分の経験を整理するなどして、それらをまとめ分析する。

## 3 参加をめざした授業づくりへの試み

### (1) 実習校から見た課題

アクションリサーチを始めるにあたり、2012年5月に実施した3年生全員対象の勉強アンケートでは、「友達に自分の考えを伝えるのが好きではない」「友達と教え合ったり相談したりしたく

ない」「分かっても発表をしない」と答えた子が半数ほどいた。子どもたちは自分の考えを伝えることを好んでおらず、友達とかかわって学び合うことのよさを実感できていないのである。

そこで、友達に自分の考えを話し、友達の考えを聞くことで、学びが深まることを実感できる授業づくりが大切ではないかと考えた。そのためには、「自分の考え（分からないことも含め）を表出しやすくなること」「友達とかかわって学び合うこと」が必要となるのではないかと仮定した。

## （２）自己の課題意識の変容

当初は、研究テーマを「傍観者になりがちな子どもが参加しやすい授業のあり方」と設定していた。しかし、実習校でのA子の観察から、教科や授業内容、環境などの違いにより学びの表れは異なることが明らかとなり、「傍観者」として特定される子がいるのではなく、「傍観者が生まれやすい状況や場面」を教師がつくり出しており、それを壊す必要があると考えるようになった。

## （３）授業実践

### ①授業実践の構想

傍観者が生まれやすい状況や場면을壊し、学びへの参加を支える授業のあり方を探るために、「ワークショップ型授業」「ジグソー学習」「オープンエンドアプローチ」「実生活に結び付く学習」を実践したり、参与観察を行ったりした。それぞれの授業の意義は、以下の通りである。

#### １）ワークショップ型授業

ワークショップ型授業は、学習者の活動が中心の授業であり、教師の説明や発問が中心ではないため、学習者の自由度が増え、試行錯誤を通して能動的な学びが可能となる。

#### ２）ジグソー学習

ジグソー学習は、話したり聞いたりする必然性のある学習である。自分とは異なる考えをもつ他者の存在があり、自分の考えを必要とされる状況を生み出すこの学習によって、一人ひとりが考えを表出し、相互作用により理解が深まり、互いの存在を認め合うことができる。

#### ３）オープンエンドアプローチ

正答が多様にあるオープンエンドの問題を扱うことにより、自信のなさや不安を抱えている子どもも、正答誤答にとらわれることなく自由に考えて自分の考えを表出し、学びに参加できる。

#### ４）実生活に結び付く学習

日常的なものを扱うと、人はより能動的に学ぶとされており、学ぶことは自分に身近なものや実生活に生きるものだと感じる事が、授業への参加しやすさにつながる。

### ②授業の実践と分析・考察

本研究では、子どもが学びへ参加しやすい授業づくりをするために、様々な教科において様々な方略での

表１ 授業実践をした単元

実践	教科・単元名	授業の方略	実施月
1	学級活動「みんなでつながるために」	ワークショップ型授業	6月
2	学級活動「動物園の案内図をつくろう」	ワークショップ型授業	6月
3	道徳「信頼し合える仲間」	ジグソー学習	6月
4	理科「こん虫を調べよう」	ジグソー学習	6月
5	国語「詩を楽しもう」	ジグソー学習	9月
6	算数「大きな数」	オープンエンドアプローチ	10月
7	算数「時間と時刻」	実生活に結び付く学習	12月

授業実践を試みた。実践した単元をまとめると、表1の通りである。ただし、実践5は実習校担当学級のA教諭による授業、実践7はA教諭とのTTによる授業である。

#### １）ワークショップ型授業（学活「みんなでつながるために」）

話すことよさを感ずてほしいと考へ、友だに尋ねたり伝へたりする必要性のあるゲームを設定した。ゲームを楽しむ中で自然と話す姿が見られ、考へを伝へることや友だと教へ合うことについて、授業後には70%を超える子が肯定的に捉えた。この授業を通して、全員が参加できる課題設定の工夫や温かい雰囲気づくりの必要があることが分かった。

## 2) ワークショップ型授業 (学活「動物園の案内図をつくろう」)

カードに書かれた内容についてグループの友だと言葉で伝へ合う必然性のある活動を設定し、互いの情報をつなぎ合わせ、案内図を完成させる授業である。最初は情報をどうつなげたらよいか見当もつかない様子だったが、徐々に情報を関連付けた話し合いへと変わっていき、授業後には96%の子が自分の考へを話せたと実感した。この授業を通して、分からないことが気軽に聞ける少人数での活動のよさや、自他の考への比較により話し合いが活発化すること、友だとともに解決したくなる課題設定を工夫することの大切さを見出した。

## 3) ジグソー学習 (道徳「信頼し合える仲間」)

勉強アンケートから明らかとなった「話すことや友だとかかわり合うことに否定的である」という課題について考へる授業である。初めてのジグソー学習であり、授業後には96%の子が友だとの話し合いができたと肯定的に捉えた。しかし、それぞれの考へを組み合わせる必然性がなく、ジグソー学習の価値を生かし切れなかった。この授業を通して、一人ひとりが持ち寄った考へを統合しなければ解決できない課題を設定することの必要性を学んだ。

## 4) ジグソー学習 (理科「こん虫を調べよう」)

昆虫のからだのつくりのきまりについて、エキスパートグループで観点別に話し合い、ジグソーグループで比較・統合することで共通性を明らかにする授業である。自分の意見が言えたと実感した子も多く、2時間続きの学習に意欲的に取り組

んだ。A男の発話の分析(表2)からは、最初は分からないと繰り返しているが、次第に自分の気づきを話せるようになっていくことが分かる。振り返りアンケートからは、自己肯定感の高まりも見られた。

全員のワークシートの分析(図1)からは、ジグソー学習により記述した観点が増えており、教師から知識

表2 A男の発話

<p>&lt;自分の考へを書く場面で、「分からない」を繰り返す&gt;</p> <p>A男: これ、<u>分かりそうなんだけど分からない。分かりそうで分からない。</u></p> <p>T : <u>いくつに分かれてるの?</u></p> <p>A男: 3?</p> <p>T : 3? いいじゃん、それ。3かなあとか書いていいよ。</p> <p>A男: <u>でも、はっきりしない。分かんないなあ。分からないなあ、なんか。</u></p>	
<p>&lt;エキスパートグループで、自分なりの気づきを話し始める&gt;</p> <p>A男: <u>こことここ、つながってると思う。</u></p> <p>B男: <u>おれもそう思うんだけど。</u></p> <p>A男: <u>よかった。おれもそう思う。こことここ、つながってると思う。</u></p>	
<p>&lt;ジグソーグループで、自分の考へを話す&gt;</p> <p>A男: <u>気がついたことある。昆虫は、頭・胸・腹で。頭・胸・腹。</u></p> <p>A男: <u>昆虫は足が6本…昆虫は、頭・胸・腹だけど。</u></p> <p>A男: <u>本物見たら、こうなつた。</u></p> <p>C男: <u>確かに、頭・胸・腹になつてる。でも、頭・胸・腹しか書いてないからさあ。</u></p> <p>A男: <u>違ふと思うけど。会社ではねえ、ここが頭、ここが胸で、ここが腹。</u></p>	

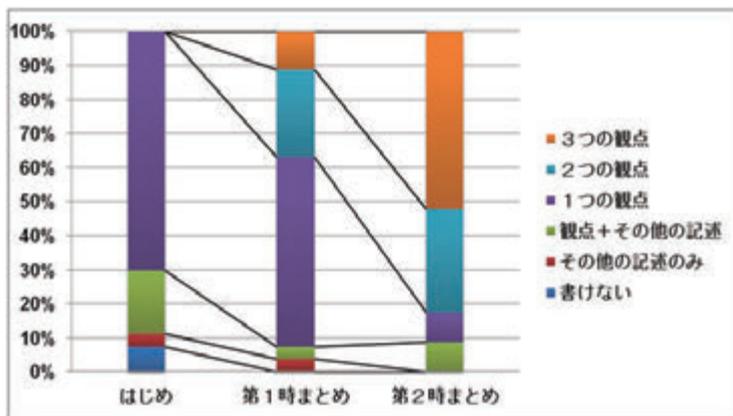


図1 昆虫のからだのつくりのきまり3観点の記述

を与えられなくても、協調学習を通して理解が深まることが示唆された。この授業を通して、一人ひとりの考えが必要な課題を設定することや、他のグループの考えが聞きたくなる話し合いの必要性、「競争」ではなく「協同」の意識をもたせることの大切さを学んだ。

#### 5) ジグソー学習（国語「詩を楽しもう」）

作者の人柄を想像することをねらいとした詩の学習である。2編の詩を、ジグソー学習と一斉学習との異なった学習法により実施することで、子どもの学びの様子を比較した。ジグソー学習では、難易度の高い詩を自分たちの力で読み取り、作者の人柄を想像することが難しく思われたが、試行錯誤しながらもグループの友達の考えを受け入れながら話し合いを進めていることが発話から見出せた。授業後には、自分の考えを話したり友達と相談したりすることに対して、ジグソー学習のほうが肯定的に捉える子が多かった。教師の発話の回数は、ジグソー学習が一斉学習の半分以下となり、一斉学習では教師が話し合いをコントロールしがちであることが明らかとなった。しかし、どちらの学習法にも長所と短所があることから、授業のねらいによって適切に取り入れることが大切である。この授業を通して、全員が話せる場を保障することや、子どもたちの力で学べるような足場づくりをすること、子どもたちの思考の流れに沿った発問をすることの必要性を学んだ。

#### 6) オープンエンドアプローチ（算数「大きな数」）

正答が多様にある学習は、自分の考えを表出しやすくなると考えた。20000点になるカードの組み合わせを多様に考える際、解の多様性ととも、一人ひとりの表現の多様性を生かすこともねらいとした。自分の考えをもつ段階では、実際にカードを操作したり、数値を書いたり、計算を使ったりと、多様な方法で自分の考えを表現した。全員が自分なりの考えをもつことができ、授業後には100%の子が一生懸命活動できたと答えている。また、「答えがいろいろあり、間違えやすくてほっとした」など、オープンエンドの価値を実感する記述も多く見られた。この授業を通して、正答や考え方が多様にある課題の設定や、子どもが自由に考え表現できる場の設定の重要性が明らかとなった。同時に、教師の出番の難しさを考えるきっかけにもなった。

#### 7) 実生活に結び付く学習（算数「時間と時刻」）

学びが教室の中だけのものではなく実生活と結び付いていることを感じられるように、算数が生活の中で使える身近な題材を設定した。時間や時刻、条件をもとにハイキングのコースを考える学習である。第1段階として、全員が参加できるように一人で計画を立てる学習を設定し、第2段階ではグループで協力して計画を立てる学習を設定した。子どもたちは、実際に時計を動かしたり計算をしたりしながらコースを考え、全グループが最後まで計画を立てることができた。単なる時間の計算に比べ、いつの間にか夢中で問題に取り組む姿が見られた。授業後のアンケートでは、算数と生活の結び付きや有用性に触れる記述が多く見られた。この授業を通して、生活の中にある身近な題材を工夫することや、話すことや聞くことが自分事になるグループ活動の必要性について学んだ。

#### ③勉強アンケートから見た子どもの意識の変容

2012年5月、7月、12月に担当学級27名の子どもを対象に実施した勉強アンケートの結果は、図2の通りである。

全体的に肯定的な意見が増えている。「友達と教え合ったり相談したりすること」についての理

由を分析すると、5月には「分かるようになる」と答えていた子どもたちが、「考えが深まる」「自分の思いつかない考えがある」などと変化をしている。子どもたちが話し合いに参加することが、互いの考えを深め合うことになってきおき、概念形成にもよい影響を与えていると考えられる。

また、「勉強が好き」「一生懸命勉強している」と答えている子も増えており、学びへの満足感が感じられる。自分の考えを表出したり、友達と話し合ったりして学びへ参加することは、情意面でも変化をもたらし、参加する意識も高まるというプラスのサイクルになると考えられる。

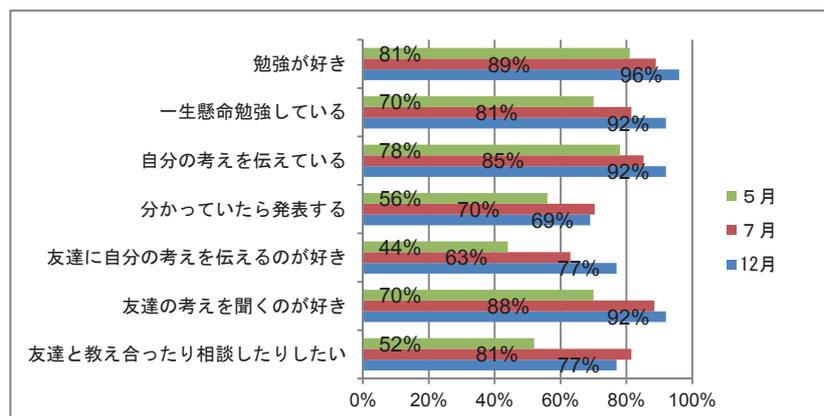


図2 勉強アンケートの5月・7月・12月の比較

#### 4 学びへの参加を支える環境づくり

学びへの参加を支える環境をつくるために、教師が工夫していることを明らかにした。その視点を整理することで、今後の授業づくりや学級づくりの際に役立てたいと考えた。実習校での参与観察や教師へのアンケート、自分のこれまでの実践を含めて整理した結果、小項目は75項目となった。それらを中項目、そして大項目へとまとめ、4つのカテゴリーに分類することができた。

- ① 社会的側面による支え（学習形態・友達とのかかわり）
- ② 環境的側面による支え（学習環境）
- ③ 情意的側面による支え（学級づくり・学習ルール・動機付け）
- ④ 認知的側面による支え（課題設定・学習展開・話し合い・個に応じた支援・評価など）

これらの4つの側面を意識し、常に子どもの立場から「子どもがどう学ぶか」を念頭に置き、学びへの参加を支える工夫が必要ではないかと考えた。

#### 5 総合考察

子どもの学びへの参加を支える授業づくりに必要だと思われる視点について、図3にまとめた。

##### (1) 子どもの学びへの参加を支える授業づくりのために

子どもたちの学びは、前述の4の4つの側面に支えられていることを踏まえ、子どもがどのように感じるかという観点から「参加を支える授業づくりの視点」について次の7項目を挙げた。「①学ぶための土台づくりの工夫」「②課題設定の工夫」「③自分の考えをもつための工夫」「④自分の考えを表出するための工夫」「⑤他者との学び合いの場の工夫」「⑥自分たちで知識を構築するための工夫」「⑦新しい学びへの意欲が高まる工夫」である。

まず、安心して学べる土台づくりが基盤となり、その土台に乗った子どもが、自分たちで学力を発揮できるような課題設定の工夫が必要である。そのことが、自分の考えをもち、表出し、他者と学び合うことにつながる。

子どもたち一人ひとりに学びへの参加の場が保障される「他者との学び合いの場の工夫」は、本研究の中でも重要な視点である。自分と違う他者の存在が学びを深めるのである。

こうして自分たちの力で学び、知識を獲得した子どもたちは、知的な深まりと自己肯定感の高まりを感じ、次への学びの意欲をもつのではないかと考える。

## (2) 教師の意識を変える

本研究及び2年間の学びから、教師の意識を変えることが、子どもの学びへの参加を支えることになると考える。

### ①子どもや授業の新たな見方

教師が知識を与えるのではなく、「子どもがどう学ぶか」という視点をもつことが重要である。この「子どもを中心とした考え方」が、参加を支える原点である。授業実践を通して、今まで

教師が丁寧に支援をしていたことは、実は効率性を重視したものではなかったかという疑問が生まれた。子どもが学ぶとは、遠回りをしたり失敗をしたりするものであり、先回りをして障害になるものを取り除くことが教師の役割ではない。子どもの自ら学ぶ力の可能性を信じ、教師が子どもに任せることも必要である。本研究のように、子どもの表れに着目することで、見えてくる学びがある。ある教育環境が万人にとっては必ずしも有効ではないと言われていることから、様々な教科における様々な授業方略の必要性を感じる。

### ②新たな視点を広める手立て

子どもや授業の新たな見方・考え方の視点を、学校現場において、お便りやインフォーマルな話し合いの場、外部の視点を取り入れた研修会等で広める必要がある。授業における子どもに寄り添った見方についても提案し、できる範囲での実践が大切であると考えます。

### ③子どもに寄り添い学び続ける教師

教師の意識を変えることで授業が変わり、子どもが変わることがあるはずである。今まで子どものためになると思って疑いなくしてきたことを、子どもにとってどうだろうかと一度立ち止まって振り返られる教師、そして、子どもに寄り添い学び続ける教師でありたい。

#### <主要参考文献>

石井順治 (2004) 『「学び合う学び」が生まれるとき』 世織書房。  
 稲垣佳世子・波多野誼余夫 (1989) 『人はいかに学ぶか』 中公新書。  
 三宅なほみ (2010) 「協調的な学び」 佐伯胖編 『「学び」の認知科学事典』 大修館書店。 pp.459-478。

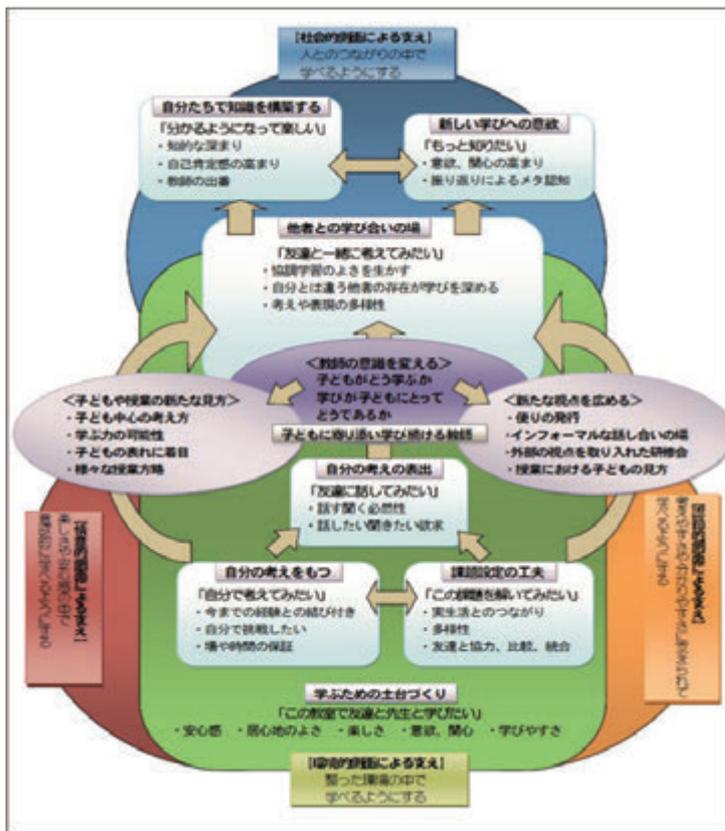


図3 参加を支える授業づくりの視点